

暑くて目が覚めた。  
江奈<sup>えな</sup>は一人暮らしの部屋の畳の上に倒れるよ  
うにして眠っていた。汗だくだった。  
頭がクラクラする。  
そうだ、昨日は手当たり次第買ってきたお  
酒をひとりでこの部屋で飲みながら、いつの  
まにか眠ってしまったのだ。  
ふらふらしながら立ち上がって、カーテン  
を開けた。強い太陽の光を顔に浴びる。  
見ると、昼過ぎだった。  
暑い：：。  
江奈は気づいたように、汗ばむ額を手  
で拭うと、エアコンのスイッチをONにし  
た。体中が汗でべとべとした。  
シャワーをあびようかと思っただが、すぐに  
行動に移す気になれなかった。  
足元に転がるビールやチューハイの空の缶

blue season  
（夏）

が 難しいくらいのところだ。交差点の途中で  
め き あ う 交 差 点 だ 。 人 に ぶ つ か ら ず に 歩 く の  
そ こ は い つ も な ら た く さ ん の 人 た ち で ひ し  
誰 も い な い 街 の 真 ん 中 で 。  
夢 の 中 で 、 江 奈 は 泣 い て い た 。  
入 っ て い っ た 。  
江 奈 は 目 を つ ぶ る と 、 再 び 浅 い 眠 り の 中 に  
で 見 え な い 海 の 中 を 。  
た 。 周 り を 見 回 し て も 、 た ど り 着 く 島 も ま る  
無 力 感 の 海 の 中 を 漂 っ て い る よ う な 感 じ だ っ  
自 分 の 状 態 に 嫌 悪 を 感 じ る と い う よ り も 、  
わ た し 、 な に や っ て ん だ ろ ？ ？ ？  
頭 痛 い ？ ？ ？ 気 持 ち 悪 い ？ ？ ？  
込 む 。 そ し て そ の ま ま 仰 向 け に 転 が っ た 。  
二 日 酔 い の 気 分 の 悪 さ に 、 ふ ら ふ ら と 座 り  
酔 い 気 分 に な っ て し ま う 。  
っ た 。 飲 み 会 に 行 っ て も 、 乾 杯 の 一 杯 で ほ ろ  
江 奈 は 決 し て ア ル コ ー ル に 強 い 方 で は な か  
を 見 下 ろ す 。 一 体 何 本 飲 ん だ の だ ろ う ？ ？ ？

いつも信号が点滅しだし、江奈は先を急ごう  
とするが、人がたくさんいて思ったように前  
に進めない。夢の中の交差点には人っ子ひと  
りいない。車も通っていない。  
静まり返った街。江奈がただひとり、そこ  
にたたずんでいる。空を見上げると、灰色の  
雲がものすごい速さで風に流されている。嵐  
の前の空のようだ。  
江奈はひとりだった。  
さびしい。  
涙が零れ落ちる。  
ひとりしないで。  
誰か。誰か誰か。  
江奈は涙を流しながら、二度目に目を覚ま  
した。  
眠っていた時間は二、三十分だったよう  
だ。

綺麗なTOPページが印象的なサイトです、ひ  
サイトだった。透明なブルーの壁紙を使った  
ブックマークしておいたそのサイトは失恋  
たこともなかった。書き込みをするなんて考  
のサイトになにか書き込みをするなんて考  
は興味がないかった。ましてや自分がどこか  
源として利用するだけで、サイト巡りなどに  
セスしてみた。前まではインターネットは情報  
酒を飲みながら書き込みをしたサイトにアク  
いた。喉を鳴らして飲んだ。とても喉が渴  
く、喉を鳴らして飲んだ。とても喉が渴  
1 ボトルを出し、キャップをとって、ごくご  
とに気づき、リモコンで設定温度を上げた。  
ながら、エアコンで部屋が冷えすぎているこ  
ONにした。パソコンがたちあがるのを待ち  
に机の上に置いてあるパソコンのスイッチを  
江奈はもそもそと起きて、思いついたよう

とりで過ごす夜の時間になんとかなくネットの  
世界を彷徨っている、たどり着いたのだ。  
そこではたくさんさんの失恋をした人たちが新  
スレッドをたてて自分の失恋話を披露してい  
た。そしてそれに対して他の人が慰めの言葉  
などをレスしていた。  
レス1 「がんばって」  
レス2 「わたしにも同じような経験があり  
ます。いいこともありますよ。今度こそ、素  
敵な恋愛ができますように」  
それに対してスレ主（つまり失恋をした本  
人）が、  
「ありがとうございます。あたにかい言葉を  
かけていただいたいて嬉しいです」  
などと書き込んでいる。  
時には辛らつなレスもある。  
「あなたに非はなかったのですか？ 一人で  
悲劇のヒロインぶってる印象を受けました」  
「  
「厳しいですね。でも確かにそういう部

分もあるかもしれない  
「などと殊勝なレスをし、また他の人が、  
「スレ主さんは悪くないですよ！　なんで傷  
ついてているスレ主さんにひどい言葉をかける  
んですか？」  
などと辛らつなレスに対する非難のレスが  
ついたりしていた。  
江奈はそれらのやり取りを最初は、  
「バカバカしい」  
と、思っただけで見ていた。知らない者同士が一体  
なにをやっているのだ、と。人の失恋話  
に興味もなかったし、それに対して慰めの言  
葉をかけたりのしている人の気持ちもわからな  
かった。  
でもそのサイトはなんとなく気になって、  
江奈は“お気に入りに登録して、毎晩のよ  
うにチェックするようになった。”  
そしてついには、江奈は初めて書き込み  
をした。酔った勢いもあったのかもしれない  
。自分の中だけに留めておくのは、もう耐

えられなかったからかもしれない。江奈は誰かの失恋話にレスしたのではなく、新スレツドをたてたのだ。ハンドルネームは「ブル」にしてみた。安易だが、ブルな気分：：というところから思いついた。「はじめまして。ブル」といいます。このサイトは最近知りました。もちろん書き込みをするのは初めてです。わたしは今年で三十歳になるOLです。うかもしれません。が、わたしはいわゆる小さ頃から「優等生」でした。は生徒会の役員もやっていました。親からも学校の教師からも信頼されていたと思います。わたしは大学を卒業して、某大手企業に就職しました。今も勤続しています。わたしの仕事は営業事務ですが、今ではそ

の仕事を  
する若い  
コたちを  
まとめ  
る責任  
者の  
仕事も  
任されて  
います。  
彼は今年  
の春頃、  
派遣社員  
として、  
うちの  
会社のわ  
たしと同  
じ課にや  
ってきま  
した。年  
齢はわた  
しより3  
つ下です。  
彼はいろ  
いろな会  
社を転々  
としてき  
たよう  
でした。派遣  
会社に登  
録しながら  
も、他に就  
職活動をし  
てきたよ  
うです。や  
はり派遣  
社員より  
も正社員  
になるこ  
とを希望  
していた  
ので、最  
初就職し  
た会社で  
は営業を  
やらされ  
てい  
たよう  
なです  
が、自  
分には向  
いていな  
いと  
思った  
そうです。  
あまり人  
と話すの  
が得意  
で  
はない  
と言  
うので  
す。  
彼のイ  
メー  
ジは確  
かに「も  
っそり」  
してい  
か、人  
の話を聞  
いてるの  
か聞いて  
ないのか  
、よくわ  
か  
らない  
よ  
うな態  
度をと  
るこ  
とが多  
か  
つた  
です。  
相手に「  
ぶっ  
き  
ら  
ぼ  
う」  
な印象  
を  
与  
え  
て  
し  
ま  
う  
た  
い  
プ  
だ  
と  
思  
い  
ま  
す。  
仕  
事  
で  
も



この態度では営業には向かないと、わたしにも理解出来るように思いました。うと：：。彼の事務能力はどうだったのかとい彼と組んで仕事をしているコ（このコは以前からいた正社員です）が、わたしのところ前に相談にきました。あまりにも彼のミスが多くて、そのフォロ－で自分の仕事が出来なく、と。教えても教える同じミスを繰り返す。あの人はやる気があるんですか？大體、人が説明している時にも聞いてるのか聞いてないのか。かわかからない。態度が悪すぎる：。わたしは彼を会議室に呼び出して、話をする。わたしは彼を会議室に呼び出して、話をする。彼の言い分を聞いて、注意を促し、仕事を円滑に進められるように指導する：：、気を遣う嫌な仕事です。でもわたしの役目なのでやらないわけにはいきません。

す  
「俺、この仕事、向いてないような気がしま  
「はい？」  
「あの……」  
ぼそつと言いました。  
彼は上目遣いにわたしを見ました。そして  
見るようにした。ほうが、いいと思うよ。」  
「人と話をする時には、相手の顔をちゃんと  
ど」わたしは言いました。  
「こんなこと、えらそうに言いたくないけ  
た。  
ませんでした。そして何もこたえませんでしたし  
彼はそっぽを向いたまま、わたしの目を見  
わたしは声をやさしくして言いました。  
「仕事、慣れましたか？」  
りました。  
を挟んで、わたしと向かい合わせの椅子に座  
な態度で入ってきました。そして長テール  
呼び出した会議室に彼はやる気のなさそう

ました。ろわ「と彼「っめも「に無：うない「た  
 ました。ろわ「と彼「っめも「に無：うない「た  
 。うとたちしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 。すすはよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 するはよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 動作はよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 の慌ちよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 途てよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 中で言いましまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 で止ましまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 まって彼は立ち上が  
 てわたしを見  
 ました。ろわ「と彼「っめも「に無：うない「た  
 。うとたちしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 。すすはよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 するはよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 動作はよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 の慌ちよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 途てよしまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 中で言いましまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 で止ましまはじぽにもら俺に無：うない「た  
 まって彼は立ち上が  
 てわたしを見

「そんな、そんな簡単に向いてないとか辞め  
るとか言わないで。もう少しやってみようと  
思わない？」  
「いや、でも……」  
彼は立ち上がるのを止めて、座りなおしま  
した。  
「だってあなた、今までの仕事も長続きしな  
いで辞めてしまったんでしよう？ 自分に何  
が向いているとか向いていないのなんて、  
そのことに真剣に取り組まなくてはわからな  
いものよ。あなた、真剣に取り組む前に諦め  
ているでしょ？」  
「彼は拗ねたように口をへの字にしました。  
「もう少し、ここで頑張ってみない？ わた  
しも仕事、教えるからね？」  
「わたしはこの時、何故自分がこんなことを  
言っってしまったのかわかりません。この不況  
の世の中、能力があっても仕事が見つからな  
い人はたくさんいると思います。やる気のな

て も ら っ て る ん で …… どこ か 飲 み に で も 行  
「 あ の 、 今 日 空 い て ま す か ？ い つ も よ く し  
た わ た し を 彼 が 追 い か け て き ま し た 。  
あ る 日 、 仕 事 を 終 え て 帰 ろ う と 事 務 所 を 出  
を し ま し た 。  
お ろ し て い る よ う な 時 に は 呼 び 出 し て 、 指 導  
彼 の 動 き に 目 を 光 ら せ て い ま し た 。 彼 が お ろ  
て い う 言 い 方 は ひ ど い か も し れ ま せ ん ね 。  
に 弱 い ん で す 、 昔 か ら 。 あ 、 “ ダ メ な 男 ” っ  
え ば 、 わ た し 、 ち ょ っ と 弱 い よ う な ダ メ な 男  
て 母 性 本 能 っ て い う も の で し ょ う か 。 そ う い  
な ら 、 ど う に か し て あ げ た い と …… こ れ っ  
す こ と は 出 来 な か っ た 。 ど う に か で き る も の  
き て い く の が 苦 手 そ う な 彼 を 、 冷 た く 放 り 出  
だ け ど 、 あ ま り に も 全 て に 投 げ や り な 、 生  
す 。  
力 が あ る 人 に 来 て も ら っ た 方 が い い と 思 い ま  
い 人 に は 辞 め て も ら っ て 、 や る 気 の あ る 、 能



に b  
つ l  
づ u  
く e  
  
s  
e  
a  
s  
o  
n  
（  
夏  
）  
（  
2  
）

わたしはへたりこんでいると、彼が目覚  
まして、わたしを見ました。そして寝ぼけた  
顔でにっこり笑って、  
「好きだよ」  
と言いました。  
それを聞いて、わたしは自分でも滑稽なほ  
ど、とてつもなくホツとしたのです。  
過ちでこういうことをしてしまったのでは  
ない。わたしたちは好き合っていて、だから  
これは自然な成り行きなのだ。  
と自分を納得させることが出来たからで  
す。いつまでも「優等生」でいたいわたし  
が、お酒の勢いでこういうことをしてしまう  
わたしを許さなかつたのです。